

スタートラインに二列に並び30人の小学生が「よいい、スタート!」の合図で一斉に駆け出す。足並みは少しのずれも許されない。全神経を集中させ、まっしぐらに50メートル先のゴールを目指す。目標は10秒突破。「達成できれば日本に行けるんだ!」。

豊かな自然に恵まれた島しょ国バヌアツ。約1万人が暮らすタンナ島では昨年10月27日、日本で開かれる「小学生クラス対抗30人31脚全国大会2006」への出場を目指し、ロカタイ小学校の5、6年生が最後の追い込みをかける。この日は日本行きを懸けたタイムトライアル当日。生徒たちを見守るのは、現職教員として派遣され、同校で算数を教える青年海外協力隊の野部克博さん。バヌアツチームに参加の可能性があることを知ると、06年7月まで同島で活動していた隊員の渡久地直樹さんの協力も得て、実現にこぎつけた。

練習を始めた9月下旬は全員が集まるだけで大変だった。2人3脚から3人、4人...と徐々に人数を増やし、全速力で走ってみても、そう簡単にはいかない。「転んでうまくいかない生徒たちはすぐ練習を休みま

# Close Up!

ジャイカのアシあと

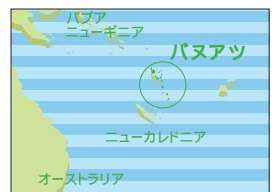


【バヌアツ】

## 子どもたちの成長につながった30人31脚

2007年1月1日、日本で放映された「30人31脚全国大会」。バヌアツチームの挑戦を青年海外協力隊が支えた。

した。普段の体育でも自分がやりたくないことはしない。それを教員が注意するわけでもない。だから「やると決めたら毎日練習する」「転んだ友達を見ても笑わない」と伝えるのも練習の一つだった。練習を重ねるごとに子どもたちはやる気を高め、ついに9秒48で大会出場を決めた。



しかし大会当日、満を持して臨んだバヌアツチームは、ゴール目前で転倒してしまふ。タイムは54秒32。悔し涙を流す子どもたちに「ゴール直後は掛ける言葉もなかった」と野部さん。だが、転んでも笑ってごまかしていた彼らが、涙が止まらないほど悔しがる。それは、人間として大きく成長できた証しだと思っている。「この経験を彼らと共有できてよかった。今後の人生に生かしてほしい」とにこやかに話す野部さんのもとで、バヌアツの子どもたちは今日も元氣よく学ぶ。任期を終えて日本の教育現場に戻ったとき、バヌアツの経験を今度は日本の子どもたちと共有してくれたらと期待している。